いてはいうまでもなく、社会福祉、高等教育などの分野で韓国において活躍しているものもいる。しかし戦前の日本の政策が朝鮮半島における女子医学教育に大きな影を落としたことは紛れもない事実である。

（東京女子大学歴史学研究室）

幻に終った国際連盟の漢方薬研究（第一報）—国際連盟保健委員会における漢方薬に関する討議—

津谷喜一郎

世界保健機関（WHO）は国際連合システムのなかでの保健に関する専門機関であり、この議事機関である世界保健会議は一九七六年に伝統医学に関する決議を採択し、同年より世界的な伝統医学プログラムを発足させている。日本においても北里研究所附属東洋医学総合研究所と富山医科薬科大学和漢診療部がWHOの協力センターに指定され、伝統医学の研究、教育、情報交換の分野などで世界ネットワークの中で活動に従事している。

この国際連合の前身にあたる国際連盟にもWHOの前身たる保健機関があった。国際連盟はジュネーブに本部をおき、一九二〇年一月に発足している。保健機関は、パリの公衆衛生国際事務局を一般医事諮問機関とし、議事機関と

しての国際連盟保健委員会、事務機関としての国際連盟事務局保健部の三つの部門からなり一九二三年十二月に発足している。

保健委員会は例年五月と十月の二回行なわれていたが、一九三一年五月四日から八日にかけての第一七回保健委員会会議で漢方薬に関する議論がなされた。これは各国政府の公衆衛生当局への協力という議題の一部で、中華民国国民政府への協力と題したうちに含まれて、五月七日の午前中に討議された。

会議の正式の参加者は十九ヶ国からの二三人の保健当局の代表と、事務局保健部部長のライヒマン博士である。日本からは、北里研究所の宮島幹之助と、当時パリの日本大使館に勤務していた内務省中央衛生局の鶴見三三、中国からは、中国政府衛生署長の劉恒任の代理として、中央防疫処長の伍連徳が参加している。

宮島幹之助と劉恒任はそれぞれ会議の参加者に、国際連盟による漢方薬研究のための委員会設立に関する提案（文書 C.H. 1005 と C.H. 1008）を配布しており、討論は宮島幹之助による日本側資料の読みあげからはじまった。日本における中国医学の歴史の簡単な紹介と、近年の漢方薬に関する科学的な研究の高まりが、当時の南満州医科大学の久保田、岡西らの研究とともに述べられ、この分野での国際協力の必要性が強調され、漢方薬研究国際委員会の設置が提案された。

次いで伍連徳により中国側の資料が読みあげられ、すでに計画されていた中国国内委員会のメンバーが紹介され、同じく、国際協力の必要性と、国際委員会の設置が提案された。

その後、ライヒマン博士により、この提案を支持する旨の発言がなされた。ひきつづきデンマーク、インド、イギリス、ポーランド、フランス、スペイン、オランダなどからの参加者による興味深い発言がなされている。

議論そのものから、いくつかのことが浮かびあがってくる。それは、㈠保健部長・ライヒマン博士が、やや強引といえるほど強力にこの提案を支持したこと。㈡インド代表が、彼の国の経験から、やや時期尚早ではないかとしたこと。当時インドはイギリス支配下にあった。㈢ヨーロッパ諸国が、全体的に好意的であったこと、とくにフランス代

表ベルナール博士の、漢方薬の研究は、東洋からの近代文明への貢献になるという説は格調高いものである。㈣漢方医学、中医学というより、漢方薬、中薬に関して議論されたこと。㈤日本ではすでに漢方薬研究を行う臨床施設があり、国内委員会もすでにできているなどの事実誤認があったこと、などである。

今回は、この討議について紹介する。今後、中国、日本、それぞれの国でのこの会議にのぞんだ背景、時代状況、その後の経過等について報告する予定である。

（東京医科歯科大学・難治疾患研究所／北里研究所
附属東洋医学総合研究所・医史文献研究室）

大東亜戦争における野戦病院

黒澤嘉幸

大東亜戦争は日本がその総力を傾け尽した戦いであった。昭和二十年八月の終戦時までに軍の動員した歩兵師団の数は一六九師団に及んだ。国運を賭して戦ったといわれる日露戦争でさえ、動員した師団は一三個であったことを考えれば、その規模の大きさが計り知られるのである。

また、その戦場も中国、満州の大陸、マレー、ビルマ等の南方諸国、樺太、千島、アリューシャンの北方諸島、南部、中部太平洋の島嶼と広範な地域に及んだのである。

もともと、師団は「戦略単位」と呼ばれ作戦の中核となるものである。このため、師団は画一ではなく、作戦時の任務、戦場の地域特性により、異なる編制をもつ師団が編成された。本大戦下で創設された師団の型は次のとおりである。

一　三単位師団